

俳句雜誌

空

空

令和3年1月31日発行

第18巻6号

通巻第94号



2021・1

SORA 94号

兵庫 岩井京子

秋冷や声の鋭き朝の鳥
 秋の草活けて山路にある思ひ
 鉄組のアーチあらはに冬の薔薇
 いつせいに時や来ると散る落葉
 体操へゆく初秋の朝日かな

大阪 田岡千章

約束の刻に間のあり金木屋
 奈良に柿ならば浪速に岩おこし
 いちじくが好きさそり座の人が好き
 ひややかや目薬を注し損ねたり
 そぞろ寒身に一喝を掛けて起く

兵庫 大西乃子

あかつきの空の一角初鴨来
 猫老いて誰にも抱かれ星月夜
 死亡欄より読みはじむ文化の日
 綿虫やこれより先は行き止まり
 コンビニに買ふ焼芋と新聞と

東京 今井康子

円きもの美しことに今日の月
 花びら茸歯ごたへのよし名前よし
 青空を半分占めて紅葉山
 風紋にしるき足跡冬隣
 湯豆腐や神田生まれの落語好き

北九州 兒玉充代

鉄塔ごと暮れゆく山やそぞろ寒
 冬深しまるく眠れば母の夢
 北風の吹きのかしたる潦
 城壁をのぼりつめたる蔦かづら
 枯れごろとなりたる木々のたたずまひ

直方 吉田悦子

木犀の香のある方へ向き眠る
 母に問ふ曜日となまへ衣被
 工場の朝のサイレン一位の実
 腎臓に小さき石やそぞろ寒
 疲れ切り戻ればまとはりつく秋蚊

兵庫 岡村尚子

そぞろ寒薬まとめて飲みにつけり
 帰りには海辺を通り七五三
 訪ひくるる子を恃みとす青木の実
 久に会ふ子の手のひらに木の実置く
 冬林檎話し相手の欲しき日よ

大阪 井上和子

風死すや軒近くまで草の丈
 挽ぎたての無花果ぬるる父郷かな
 故郷を捨てし歳月秋の蟬
 秋暁や遺影の父と目を合はす
 寝返りのたびに枕の黴にほふ

福岡 栗原京子

人形を預けに寺へ紅葉谷
桐一葉敗者の歴史葬られ
神域は猫のアジトや夕紅葉
お地藏様山より降る秋祭
旅人に湯舟やさしき夕月夜

兵庫 青木朋子

手みやげに庭の花摘む秋はじめ
ここだけを風の暴れし稲田かな
初嵐のせいよテニスの敗北は
橋崩えて瀑布のごとく葛垂るる
失明後描かれし絵とや虫の声

東京 山田正子

花八ツ手花の盛りを見逃せり
望の夜習ひ損ねしハーモニカ
湯気しとど見学を待つ湯揉板
アフガンの地の塩となりクリスマス
古民家の火のなきかまど茸飯

神奈川 窪みち子

猿茸に腰掛け富士を眺めたし
故郷に知る人僅かみのこづち
ホルンの音流れ燕岳霧の中
残照の故郷や雪の劔岳
鬱々と来て霜柱強く踏む

北海道 押田裕見子

新豆腐嬰が湯船に浮くやうに
病窓の紅葉明りに揺らぎゐて
手鏡の古き傷跡雁渡し
いとけなき緑の中の初紅葉
枯芒銀の雫をこぼすてふ



空集抄——柴田佐知子抄出

煙より村現るる秋収め

高倉和子

綿虫のすでに来てをる屋敷神

中田みなみ

鞍擦れの馬の背洗ふ秋日かな

深川淑枝

定年のあとの歲月冬帽子

戸栗末廣

休みたる子へ諸掘りの諸届く

永淵恵子

鹿鳴くや菜を摘む手元闇迫り

原友子

生き生きと人が斬りあふ村芝居

松田明子

蒲団被るこの世を遮断するやうに

石橋幾代

収まればすべて些事なり秋扇

角野良生

仏壇の奥を乾拭き秋日和

曾根富久恵

母泣けば吾も泣きたし蓼の花

吉田悦子

あの世でもこの世でもなく風の盆

牧康子

針もたぬ母の晩年秋日和

井上和子

湾沿ひの古き酒場の聖樹かな

山内碧

殊更に新酒と云うて酌み交はす

石川子熊

青空に引つ付いてゐる木守柿

大西乃子

夏芝居若者凌ぐ老いの殺陣

古賀真理

母馬のどこかに仔馬触れたがる

吉田律

魯田に清洲会議のごと雀

小林朱夏

軽くスクワット冬鷺の動くまで

服部早苗

水鳥の声を使はず群れてをり

山本則男

伝説の古代水路に刈田風

三井所美智子

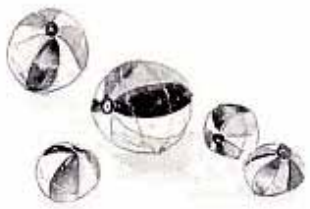
夜仕事のために生まれてきたやうな

仲里奈央

子の去りてよりの原つば昼の虫

苑実耶





茸山見慣れぬ顔と言はれけり

三越の袋に甘藷もらひけり

違ふ色違ふ音して落葉掻き

文化の日人にいくつの蝶番

実南天線香にのみ擦るマツチ

漆練るへらの薄さや雪催

捌きたる猪の血川へ流しけり

流灯の隣り合ひしも縁かな

青春はアメリカ映画木の葉髪

菊の鉢並べ下町愛想よき

掛軸を替へて定まる冬座敷

種落とす前に引き抜く猫じやらし

秋の蚊や全集歪む古本屋

田中とし江

あさなが捷

星加鷹彦

田岡千章

横田敬子

むつみ蓮

坂口学

山田正子

森田明成

林れい

押田裕見子

河原敬子

松尾康代

知られてもよいこと絵馬に冬日和

病む妻に教はる家事や秋深し

林檎届く志賀高原の蟻つけて

待つことに慣れてまだ待つ冬桜

雪のせし山なみ少し近づきぬ

跳ねながら渡る飛石秋気澄む

干布団いまま少し世を愉しまむ

おとろへし歩みも楽し草の花

落花生茹でて食べよと畑より

茶の花やいにしへの道そのままに

老いてなほ棟梁身軽天高し

かなかなや逆らひし日の母の顔

泣くほどの夢を忘れて霜の花

青木朋予

佐藤和弘

本多トミ

林徹也

今井康子

小島翠波

窪みち子

岩井京子

村上二三

岡村尚子

岩下きぬ代

荷宮克代

矢野綾子

空集作品評

柴田佐知子

煙より村現るる秋収め

高倉 和子

田で刈穀などを焼いている煙が流れているのである。〈秋収め〉には〈煙〉が詠みこまれた句が数多あるが、掲句の眼目は上五に置かれた〈煙より〉である。煙そのものの描写ではなく、その向こうから〈村〉が現れてきたのだという。ゆつたりとしたスケールがあり、収穫を終え満ち足りた村のふくよかな空間が詠み止められている。さりげない表現の奥の技量が光る作品である。

生き生きと人が斬りあふ村芝居

松田 明子

季語は秋の収穫のあとに村人が演じる〈村芝居〉。私は四国を旅した時に、農村歌舞伎に行き合わせたことがある。演者も観客も大方は村人で、客席からの掛け声も賑やかだ。何度もどつと笑いが起こつた。掲句は一番の見どころの場面であろう。十分に稽古も積んだ大立ち回りだ。〈生き生きと人が斬りあふ〉と一気に詠み下ろされて愉快。村中で楽しむ〈村

芝居〉の雰囲気伝わってくる。

蒲団被るこの世を遮断するやうに 石橋 幾代

頭まで被った蒲団の闇の中に籠る。〈遮断〉という強い言葉が、鬱屈した思い、或は悲しみや怒りといった感情をぶつけたような痛みを感じさせる。

仏壇の奥を乾拭き秋日和 曾根富久恵

空気も澄んで晴れ渡った秋の昼。爽やかな空気が家の中にも行きわたる。静かな寸景を切り取っただけなのだが、丁寧に暮らす日本の日常を映像化したような懐かしさを覚える句である。

母泣けば吾も泣きたし蓼の花 吉田 悦子

私は幼いころに母が隠れるように涙を拭っているところを見た時のことを思い出す。どうしようもない不安と悲しみて体がすくんでしまった。今は白寿を迎えた母が、私に大きな負担をかけているのではと心配する時、私は胸が締め付けられる。〈母泣けば吾も泣きたし〉：掲句の背景は分から

ないが、誰もがこの悲しみは知っていることと思っ

た。心情がストレートに詠まれているのに、読む者にそれぞれの景をひろげてゆく奥行きがある作品だ。添えられた〈蓼の花〉の素朴さがやさしく、なつかしい。

針もたぬ母の晩年秋日和

井上 和子

和裁を習ったことのある母は、頼まれると着物を仕立てていた。子供の頃は洋服も縫ってくれていたが、いつからか取れたボタンも私が付けるようになっていた。

和子さんの母上もよく針仕事をされていたのであろう。思いつの中での晩年の母が(秋日和)によって、やさしく詠まれている。

殊更に新酒と云うて酌み交はす

石川 子熊

気の合う友との酒席であろうか。〈殊更に〉が効いている。新酒ということ、今の若者言葉でいえば、テンションが上がる！である。〈酌み交はす〉によってその場の楽しさが溢れだしてくる。言葉が的確に配置されているのである。

稲田に清洲会議のごと雀 小林 朱夏

刈田の切株が再び青々と萌えだし稲穂が出ているのであろう。雀たちが集まり恩恵を享受している明るい光景である。雀の群れは驚くほど賑やかだ。ここに本能寺の変後の事態收拾のため織田諸將が協議した〈清洲会議〉をもつてくるとは。まことに自由自在だ。朱夏さんののびやかな心の在り様がなせる措辞である。比喩のずれが楽しい。

その他とり上げたかった多くの句の一部をあげる。

綿虫のすでに來てをる屋敷神	中田みなみ
軽くスクワット冬鷺の動くまで	服部 早苗
夜仕事のために生まれてきたやうな	仲里 奈央
文化の日にいくつの蝶番	田岡 千章
実南天線香にのみ擦るマツチ	横田 敬子
菊の鉢並べ下町愛想よき	林 れい
林檎届く志賀高原の蟻つけて	本多 トミ
待つことに慣れてまだ待つ冬桜	林 徹也
干布団いまま少し世を愉しまむ	窪 みち子
泣くほどの夢を忘れて霜の花	矢野 綾子



玉子かけご飯四日の静かなる
毛糸編む生きてゐる夜を延ばすべく

針のごとき猪の毛残るぬた場かな 北州 深川淑枝

猪捌きし牛刀川に沈めけり

夕づつや稲架のうしろを潮流れ

鷹去りし空のしじまや畝起す

蟻螂の吹かれては貌拭ひをり

鞍擦れの馬の背洗ふ秋日かな

角伐られ一途に水を呑みゐたる 広島 戸栗末廣

幼な子の声に蜻蛉の目がうごく

巖ぶすまよりもけはしき鶏の声

湯ざめして島々闇のかたまりに

ゆふばえは翼をひろげ神送

定年のあとの歳月冬帽子

入りてすぐ出口を探す芒原 福岡 高倉和子

ゆつくりと岸へ傾く月見舟

けんかして一緒に帰る草の花

張り替へし障子しづかに開けにけり

山壁のうごめいてゐる稲光

煙より村現るる秋収め

砂時計捨てて師走となりにけり 東京 中田みなみ

妙齡のマスクに屋号耀り落す

思ひ出は色より浮び切山淑

綿虫のすでに来てをる屋敷神

鷹渡り終へて全き空の青 福岡 永淵恵子

秋天に投網大きく開きけり

掘りあげし端より藪の乾きけり

休みたる子へ藪掘りの藪届く

釘を打つ間の遊び打ち天高し

口笛に月光の窓開きけり

鷓猛る湖底の戸戸を覚まさんと 千葉 原 友子

鹿鳴くや菜を摘む手元闇迫り

通るたび畏の狸と目が合ひぬ

小春日や研ぎ了へし手の鉄臭し

枯葦原万のさざ波容れつづけ

指輪無き手に新藁の匂ひかな

振り上げし太刀おろされず菊人形 熊本 松田明子

衿元は蕾のままや菊人形

玉子かけご飯四日の静かなる

毛糸編む生きてゐる夜を延ばすべく

針のごとき猪の毛残るぬた場かな 北州 深川淑枝

猪捌きし牛刀川に沈めけり

夕づつや稲架のうしろを潮流れ

鷹去りし空のしじまや畝起す

蟻螂の吹かれては貌拭ひをり

鞍擦れの馬の背洗ふ秋日かな

角伐られ一途に水を呑みゐたる 広島 戸栗末廣

幼な子の声に蜻蛉の目がうごく

巖ぶすまよりもけはしき鶏の声

湯ざめして島々闇のかたまりに

ゆふばえは翼をひろげ神送

定年のあとの歳月冬帽子

菊人形在す二の丸三の丸

境内のどこかが濡れて菊花展

生き生きと人が斬りあふ村芝居

命日を待ちて新米炊きにけり

なにもかも突破して猪納屋荒らす 直方 石橋幾代

蒲団被るこの世を遮断するやうに

花ほぐれ優しくなりし菊人形

水打つと更にたかぶる大焚火

しぐるるや炭火熾りてより匂ふ

巡礼の白く連なる秋の暮

岩牡蠣の太き底潮の速さ言ふ 福岡 角野良生

収まればすべて些事なり秋扇

隅つこと言ふ居心地や昼の虫

死にやうも生きやうのうち鱈雲